ブレイクの哲学

—— *The Marriage of Heaven and Hell* について ——

秋 山 照 男

William Blake (1757-1827) の *The Marriage of Heaven and Hell* (「天国と地獄との結婚」) は，奔放な幻想と奇警な断定に満ちた衝撃的な作品である。書かれたのは彼が33才の頃，丁度フランス革命の進行の最中である。この書も，この一二年前，彼の発明した，いわゆる 'Illuminated Printing' (光彩版画) の技法によって印刷された27枚の版画から成っていて，現存する原本はわずかに 9 部である。[1)]同じ方法によって前年の1789年に製作された '*Songs of Innocence*' (「無垢の歌」) に比べると，この書には彫刻された挿絵のある頁が比較的少なく，17枚である。（もっとも行間や余白に小さな人間や動物や植物の装飾画が入っているのは，ほとんど全頁である）そして文字はすべて，黄，橙，赤，青，藍などさまざまの彩色が施されている。また，この書は最初の序詩一つを除いて，すべて散文で書かれている。

さて，この作品はブレイクの新しい着想を，赤裸に直截に表現したもので，彼の特異なまでに個性的な哲学思想を，ゆたかにその中に含んでいる。それ故この書を綿密に検討することは，ブレイクの根本思想を理解する上で，きわめて大きな意味を持つものである。すでに古くは Swinburne をはじめとし，多くの批評家や学者によって，さまざまな解釈が現在まで為されて来たのであるが，私も私なりに率直な感想と意見を記してみようと思う。

1

この書の劈頭は 'The Argument' と題する22行の無韻の不定形詩によって

飾られている。

Rintrah roars & shakes his fires in the burden'd air;
Hungry clouds swag on the deep.

Once meek, and in a perilous path,
The just man kept his course along
The vale of death.
Roses are planted where thorns grow,
And on the barren heath
Sing the honey bees.

Then the perilous path was planted:
And a river and a spring
On every cliff and tomb:
And on the bleached bones
Red clay brought forth.

Till the villain left the paths of ease,
To walk in perilous paths, and drive
The just man into barren climes.

Now the sneaking serpent walks
In mild humility,
And the just man rages in the wilds
Where lions roam.

Rintrah roars & shakes his fires in the burden'd air;
Hungry clouds swag on the deep.[2)]

Rintrah はブレイクの創造した人物の名で，正義の怒りを表わす。[3)] 彼が咆哮し，怒るのは，因習と伝統の束縛で重苦しく窒息しそうになっている現在の人間世界を見たからである。原画では最初の二行と最後の同じ二行だけが，鮮やかな赤色で彩られているのが目につく。この詩の言わんとする所は次のような

ものであろう。

かつて楽園に生れたが，誤ちを犯したためそこから追われた柔和で正しい心を持った人間が，危険と困難と戦いながら，不毛の土地を，労働と創造によって，生命と平和に満ちた美しい緑の園に一変させた。しかるに，いつの間にか，邪悪な人間が，彼らの安易で貧しい土地を捨てて，正しい人間が築き上げた豊かな土地に侵入し，彼らをそこから再び不毛の地に追い出してしまった。そして，悪人たちは卑劣な狡智と偽善によって，いまそこを我がもの顔に支配しているのだ。狂暴な力の徘徊する荒野に放逐された正しい人間たちは，ただ怒りに狂わんばかりである，と。

この詩の挿絵には，実も葉もほとんど無い一本の樹に，一人の少女が登り，下に立って見上げているもう一人の少女に，あるか無さかに等しい果実らしいものを，手から手に渡そうとしている姿が描かれている。その下の地面には，三人の男女が，無気力な様子で横たわっている。この図が，詩の中の ‘barren climes’ を表わしているのは明らかである。

2

この詩につづいて，ブレイクは今や新しい世界が始ったことを高らかに告げる。

> As a new heaven is begun, and it is now thirty-three years since its advent: the Eternal Hell revives. And lo! Swedenborg is the Angel sitting at the tomb: his writings are the linen clothes folded up. Now is the dominion of Edom, & the return of Adam into Paradise; see Isaiah xxxiv & xxxv Chap.[4)]

「新しい天国」が到来したので「永遠の地獄」が復活したと言う。それ以来33年になると彼が言うのは，この作品が書かれた1790年から33年前，すなわちブレイクが生れた1757年に，当時ヨーロッパに大きな影響力を持っていた神秘

思想家 Swedenborg が，天地が一変する新時代が到来すると，たまたま予言していたことに因んだものである。しかし，ブレイクは，かつて若い時は彼の思想の共鳴者であったが，今では彼に背を向けていて，Swedenborg の著作は，イエスが墓から復活して天国に昇ったとき脱ぎ捨てられた衣服のように，過去の遺物となったと言うのである。

つぎに出てくる Edom は旧約聖書の創世紀36章に記されている人物で，Esau とも呼ばれる正義の人である。彼は狡猾な弟の Jacob の策略に打ち勝って，奪われていた彼の土地相続権を回復したのであった。この Edom が今や世界を支配する時代となり，Adam は再び楽園に復帰した，と言うのである。イザヤ書34章および35章は，イスラエルの民に迫害を加える外敵たちに，エホバの神の怒りの裁きが，やがて下ることを予言したものである。

この頁の上部の挿絵には，赤と黄の燃えさかる炎の中に，両手を左右に大きく拡げた，裸身の逞しい人物像が描かれている。Keynes によれば，この人物は「解放された魂」を表わすものと言う。[5]

さて，これにすぐ続いて，ブレイクは彼の革命の基本精神とも言うべきものを，次のように宣言する。

> Without Contraries is no progression. Attraction and Repulsion, Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to Human existence.
>
> From these contraries spring what the religious call Good & Evil. Good is the passive that obeys Reason. Evil is the active springing from Energy.
>
> Good is Heaven. Evil is Hell.[6]

これは極めて大胆な断定的命題である。'Contraries' が人間の生存と進歩に必要不可欠である，というのは人間の歴史を見ても，また私たちの生活の経験に照らして考えても，大体において，首肯される事実であり，また 'Good is Heaven. Evil is Hell.' というのも，別に事あたらしく言うほどのことではな

い。瞠目すべき新しい考えは，'Good' を 'passive' なものとし，'Evil' を 'active' なものとしたことである。また 'Good' の起源を 'Reason' に，'Evil' の起源を 'Energy' にあると断定したことである。

思うに，私たちの一般的な倫理的・宗教的見地からすれば，「善」は必ずしも「受動的」なものではなく，また「悪」も決して一概に「能動的」なものではない。また，「善」と「悪」との価値判断の基準は，多くの思想家や良心的に生きようとする人びとにとって，頭を悩ませて来た困難な問題でもある。そのような状況を意に介することなく，ブレイクは自己の直感と洞察によって，悪を能動的なものとして捉え，その起源を energy に在ると見たのは，独創的で，極めて大胆な主張である。「能動」とか「活力」とかは，普通の考え方からすれば，いづれも一つの積極的な価値であるから，彼の言う所が真実ならば，「悪」は反って「善」である，という逆説が成立するからである。

しかし，彼の逆説的真実が，さらに目ざましい衝撃的な外観を示して，私たちの前に提示されるのは，次の 'The Voice of the Devil' においてである。

3

「悪魔の声」は次のように言う。

All Bibles or sacred codes have been the causes of the following Errors:

1. That Man has two real existing principles: Viz: a Body & a Soul.

2. That Energy, call'd Evil, is alone from the Body, & that Reason, call'd Good, is alone from the Soul.

3. That God will torment Man in Eternity for following his Energies.

But the following Contraries to these are True:

1. Man has no Body distinct from his Soul; for that call'd Body is a portion of Soul discern'd by the five Senses, the chief inlets of

Soul in this age.

2. Energy is the only life and is from the Body and Reason is the bound or outward circumference of Energy.

3. Energy is Eternal Delight.[9)]

これは驚くべき提言である。まず，誤りとされた最初の三つの命題を取り上げて，検討して見よう。

1. 「人間は Body と Sool の二つの実在する素因を持つ」というのは，古来一般に広く受け入れられて来た，ほとんど常識的な事実であると言える。これが果して誤りであろうか。

2. 「悪と呼ばれる Energy は肉体のみに起因し，善と呼ばれる理性は霊のみに起因する」というのは，先にも述べた通り，いささか問題のある言い方であるが，肉体を悪と見，霊を善と見る考え方は，広く行われており，とくに西洋では，キリスト教思想の影響の下に，そのような見方が強く人びとを支配していたことは事実である。すでにギリシャの昔から，「肉体は魂の牢獄である」というようなプラトンの考えもあったことである。しかし，ブレイクによれば，これも誤りであると言われる。

3. 「神は energy の赴くままに行動する人間を永久に苛責するものである」というのは，これまた明らかに当時のキリスト教神学の人間観の表現であろう。悪である肉体に起因する energy に従っての行動は悪であるゆえに，神がそのような人間を罰するのは，まことに当然であるからである。これも，しかし，誤りとされる。

さて，ブレイクによれば，このような虚偽が信じられるに至ったのは，すべて今までの聖書や聖典が，そのように説いたためである。勇敢にもブレイクは，これら一切の聖なる伝統の教えを，虚偽なりと否定し，ニイチェ的な「価値の転倒」を宣言するのである。それは次のような主張である。

1. 「人間は霊から区別される肉体を持たない。肉体と呼ばれるものは，現代にあっては，霊の主要な入口であるところの五官によって認められる霊の一部分なのだから」と言う。これは眩惑的な表現を含んでいる。それにブレイクは

厳密な論理学者ではない。この命題も，よく見ると，「一部分」とか，「主要な」とか，「現代にあっては」とか，いくつかの限定的条件が加えられているのだが，その背景となるものは何等説明されていないので，その意味は曖昧乃至不明のままである。ただ，それを詮索することは，私には余り重要なこととは思われない。肝腎なのは，彼が何よりも言いたのは，「肉体などと言われるものは，じつは存在しないのだ，すべては霊なのだ」ということなのである。これを独断であると言うのは容易である。しかし，彼が強調しようとする所は，「肉体は大切なものなのだ，尊ぶべき神聖なものなのだ」ということなのである。それは次の更に誤解されやすい逆説的命題によって，力強く表現されているのが見られる。

2.　「Energy こそ唯一の生命であり，それは肉体に由来する。そして理性は Energy の限界あるいは外周である」と。ブレイクの表現は，あまりに簡潔，また唐突であり，そのために彼の思想の真意を捕えることが困難である場合が多い。これもその典型的な一例である。J. M. Murry はこの箇所にふれて，「ブレイクの言葉の節約ぶりはじつに『悪魔的』である」と洩らしているが，[8] 同感せざるを得ない。

混乱を免れるために注意すべきは，同じ言葉が前段と後段では，別の意味で使われていることである。後段で，「Energy こそ唯一の生命であり，Body に由来する」と言うが，ここでの Energy とか Body と言われているものは，前段でそう呼ばれたものとは明らかに別のものと解されるのである。なぜなら，後段の真とされる命題1によって，Body はすでに Soul と呼んで差支えないものになっているからである。同様に Energy もまた，元の単に肉体である肉体から発するものではなく，霊である肉体，あるいは肉体である霊から発するものとなっているのである。Reason についても，また同様の変化が起っている。それは，前段の誤った命題の中では，ただ Soul にのみ由来するものであったが，後段の真の命題の中では，Soul は Body と等しいものとなっているのだから，この Reason もまた，全く新しいものとなっているのである。それは，今では，Energy の限界または外周である所の存在なのである。

結局，簡単に言えば，ブレイクの言わんとする所は，従来の霊と肉とを分離し，対立させる見方は誤りであり，両者は人間の真の本質である Energy によって一体のものである，ということである。それ故，次の力強い断定が導かれるに至るのである。

3.「Energy は永遠の歓びである」と。これは単なる命題ではなく，ブレイクの挑戦であり，同時に勝鬨の声である。ただ，誤解してはならないのは，彼は理性を不要なもの，あるいは有害なものであるなどと言っているのではない，ということである。「対立物のない所に進歩はない」のであるから，Energy の対立物としての理性は，あくまで必要である。ただ，それは Energy の限界としてのもの，彼の言う passive なものに過ぎない。Energy こそ主であり，理性はあくまで従でなければならない，というのが彼の真意である。

4

こうして主客転倒，価値の逆転が宣言された。彼はさらに自己の主張を敷衍して，昂然と言う，

> **Those who restrain desire, do so because theirs is weak enough to be restrained; and the restrainer or Reason usurps its place & governs the unwilling.[10)]**

ここでの 'desire' は単に肉体的欲望を意味するものではなく，広く人間の活動意欲全体を表わすものであろう。それを抑制する人びとは，要するに desire が弱いのであり，誤った理性に自己の主導権を委ねてしまっているのだ，と非難されているのである。これは，いわばニーチェ的な「強者の論理」であろう。まことにブレイクは，たぐい稀な強者であった。

彼の強引な論理の鉾先は止まる所を知らず，つづいて Milton の「失楽園」と「聖書」にまで及ぶのである。彼の説によると，「失楽園」では，支配者である理性は「救世主」(Messiah) と呼ばれているが，じつは，この「救世主」は悪魔なのであり，彼は地獄に堕ちて，その深淵から盗んだもので天国を創っ

たのである。ミルトンが天使や神のことを書くときには，自由に筆が運ばず，悪魔や地獄のことを述べるときには，筆が伸び伸びとしているのは，彼が真の詩人であって，自らそれとは知らず，悪魔の党派に属していた証拠である，と言う。また，聖書の中の Jehovah も，「燃えさかる炎の中に住む者」すなわち悪魔に外ならない。キリストの死後は，彼が Jehovah になったことを知るべきだ，と断言する。こうしてミルトンの Messaiah も，聖書の Jehovah も悪魔にされてしまい，地獄が天国となった。まことに大胆不敵なことと言わねばならない。このような破天荒な宣言を唱えるときの，ブレイクの軒昂たる面構えと呵呵大笑が，まざまざと思い浮べられるほどである。

5

ブレイクの創造した「新しい天国」である「地獄」の姿は，これに続く五つの ‘A Memorable Fancy’ と題した章で，奔放な想像力を駆使して描かれている。以下，それを順を追って眺めて見たいと思う。

第一番目の「幻想」の中で，彼がこの地獄の性質を最も色く表わすものと考える「地獄の格言」 (Proverbs of Hell) を挙げているのは，じつに興味深いものがある。この格言の数は丁度70であるが，そのほとんどが，ブレイク一流の機智と諷刺とユーモアにすら溢れていて，アフォリズム文学の傑作と言うことができる。これらの格言は一定の秩序に従って並べられているとは到底思われず，彼の思いつくままに書き列ねられたものと見られる。まことに「これらの素晴らしい断片の中に，一つの主要な目的を探し出そうとするのは誤りであろう」と彼の伝記作者 Gilchrist が言っているのは，[11] けだしもっともなことである。ただ，一見雑然としいるこれらの格言の群も，よく見ると，いくつかの同巧異曲のものがあり，それを分類してまとめてみると，おのずからブレイクの思想の基調とも言うべきものが，いくつか浮び上ってくるのである。私の見る所では，それは大体次の三つくらいに分けられると思う。（もちろん，すべての格言がこの三つの群に分類されるものではなく，また各々の群に属する

と思われるものも，その全部を挙げたわけではないことを，お断りしておかねばならない)

1) 相反するものが一致すること，または，矛盾の中にこそ真実があることを述べたもの。

Eternity is in love with the production of time.
One thought fills immensity.
Excess of sorrow laughs. Excess of joy weeps.
If others had not been foolish, we should be so.
Joys laugh not! Sorrows weep not!

2) Reason ではなく，desire または energy に従って生きることを讃えるもの。(これに属するものが最も多い)

The road of excess leads to the palace of wisdom.
He who desires but acts not, breeds pestilence.
The wrath of the lion is the wisdom of God.
The tygers of wrath are wiser than the horses of instruction.
Exuberance is Beauty.
You never know what is enough unless you know what is more than enough.
Enough! or Too much.

3) すべての存在はその本性 (identity) に忠実に生きるべきであると説くもの。(これもまた多い)

Dip him in the river who loves water.
No bird soars too high, if he soars with his own wings.
Let man wear the fell of the lion, woman the fleece of the sheep.
The eagle never lost so much time, as when he submitted to learn of the crow.
If the lion was advised by the fox, he would be cunning.
The bird a nest, the spider a web, man friendship.

以上は極めて大まかな分類であって，これら三つのどれにも属さないものも多いが，ここでは省略させていただくことにする。ともかく，この宝石箱をぶちまけたような色とりどりの群が，大体どのような種類の宝石から成っているかが，ほぼ明らかになったと思う。

6

つづいてブレイクは，「記憶すべき幻想」の第二部へと案内する。彼は予言者 Isaiah と Ezekiel と食事を共にしながら，彼らが本当に神を見，神の言葉を聞いたのか，と訊ねる。すると Isaiah は答える，

> 'I saw no God, nor heard any, in a finite organical perception; but my senses discover'd the infinite in every thing, and as I was then perswaded, & remain confirm'd, that the voice of honest indignation is the voice of God, I cared not for consequences, but wrote.'[12)]

つまり， Isaiah は直接彼の目や耳で神を見たり聞いたりしたのではなく，万物の中に，神と等しいもの，すなわち「無限なるもの」（the infinite）を見たのであり，また人間の率直な正義の怒りの中に，神の声を聞いたのであった。

つぎに Ezekiel は，この「無限なるもの」を見ることが，我々の哲学においては，人間の認識の第一原理であり，君（ブレイク）が 'Poetic Genius'（詩靈）と今言っているものにあたると説明する。

ついでながら，ここで Poetic Genius と呼ばれているものは，ブレイクの抱いていた基本的観念の一つであって，彼の芸術家的宗教観の表現であることに注目せねばならない。彼の考えによれば，これは人間を人間たらしめているところの形而上的本質，プラトンの「人間のイデア」の如きものである。この作品に少し先立って書かれた 'All Religions are One'（1788年頃の作）の中で，彼はそのことを明確に述べている。それによると，この Poetic Genius こそ true Man であり，人間の外形が千差万別でありながら，しかも皆似ているのは，この Poetic Genius が存在するからである。また，すべての宗教は，こ

の Poetic Genius を，それぞれ異なるやり方で受け入れたものに過ぎず，それ故，すべての宗教の起源は一つである，と言っている。

さらに，'the infinite'（無限なもの）という観念も，彼にとって重要なもので，これを見ることが，神を見ることに等しいというのが彼の信念であった。上の「すべての宗教は一つ」と同じ頃に書かれた 'There is no natural Religion'（自然宗教は存在せず）の中で，彼は次のように言う，

> The desire of Man being Infinite, the possession is Infinite and himself Infinite.[13)]

人間の欲望は無限であるから，人間の所有するものも無限となり，人間自身も無限な存在となる，というのは，いささか詭弁的であるが，若きブレイクの宏壮な気字と底抜けの楽天主義を示唆して興味深いものがある。

7

第三の「記憶すべき幻想」は地獄の印刷所の光景である。この印刷所の見学のあとで，ブレイクが書き記している感想の中で，注目すべきものが二つあると思われる。

一つは，人間が二つの class，すなわち，the Prolific（多産的なる者）と the Devouring（貪り費す者）の二つに分けられていることである。そして，この両者は互に敵であらねばならず，両者を和解させようとすることは，生存を破壊することである，と言われる。「相反するものは人間の生存に必要である」と最初の宣言に述べられた考えが，ここにも繰り返されているのである。

いま一つは，「神のみが多産的な者ではないのか」との或る人びとの疑問に答えて，「神は諸々の生きもの，また人間の中に在って，行為し，存在するだけである」と明言していることである。ブレイクは「高きにありて見そなわす神」，人間を超越して天に存在する神を認めなかった。神は，すべて生きとし

生けるものの中に内在して働くものと考えられた。「私も神，君も神になれる」と晩年のブレイクが或る人に語ったのは有名な話である。

8

さて，第四の「幻想」は最も長いものであるが，悪魔の徒を自称する「私」ブレイクが，訪ねて来た一人の天使と対決する物語である。この五つの「幻想」の中で，最も生彩に富んだ奔放な想像が展開されているのだが，以下，その梗概を述べておくことにする。

まず天使は，ブレイクが今焦熱地獄に堕ちつつあると警告し，彼にその永劫の運命を見せようと言う。天使は彼を案内して，洞窟を抜け，無限の深渕の上に導く。暗黒の太陽，巨大な白と黒の蜘蛛の群，炎の雲，闇の海，突進してくる大蛇の姿をしたレヴァイアサン……。しかし，ブレイクは平然とこれらの妖怪変化を見つめ続けていると，すべては消え去り，いつか彼は川のほとりのさわやかな岸辺に坐っていて，楽の音に聴き入っている自分に気がつく。彼は天使に向って，いま見たものはすべて天使の形而上学の生んだ幻に過ぎないと言ってのける。

今度はブレイクが天使にその運命を見せる番となる。彼は強引に天使を抱きかかえ，宇宙に向って飛翔する。太陽に突入し，そこから土星に辿り着き，さらに土星と恒星との間の虚空に躍り入った。そこに厩と教会があり，教会の祭壇に天使を導き，聖書を開くと，それには深い穴が明いていた。その穴を降りて行くと七つの煉瓦造りの家があり，その一つに二人は入った。するとそこには，胴体を鎖で縛られた沢山の猿や狒々がいて，互に歯を剝き出し，摑み合いながら，相手の手足を食いちぎり，やがては残りの胴体をも貪り尽し，惨澹たる光景であった。その悪臭に堪え切れず，二人はそこを逃げ出して元の出発点に帰り着いた。ブレイクはその場所の記念品として，死体の骸骨の一つを持ち帰ったが，今はそれはアリストテレスの分析論に変っていた。これがブレイクの天使に示して見せた天使の運命であった。

こうして彼らは互の運命を見せ合ったのだが，その結果，ブレイクは自分の運命が，天使のそれよりも優っていると信じたのは明らかである。つづいてブレイクは，スヴェーデンボルグの学説への不信と貶下を再び強く表明して言う。

Now hear a plain fact: Swedenborg has not written one new truth. Now hear another: he has written all the old falshoods.

And now hear the reason. He conversed with Angels who are all religious, & conversed not with Devils who all hate religion, for he was incapable thro' his conceited notions.[14]

スウェーデンボルグは，自惚れた考えの持主であったために，宗教的な天使とばかり語り合って，反宗教的な悪魔と語り合わなかったため，何一つ新しい真理を発見していないと非難されているのである。もっとも，晩年のブレイクは，彼を訪ねて来た Crabb Robinson に向って，スウェーデンボルグは神聖な教師で，大きな貢献を果した，しかし彼は，理性で理解できないことを，理性に向って説明しようとしたのが誤りであった，と語っている[15]から，彼の生涯を通じて見るとき，スウェーデンボルグへの尊敬が，全く失われたわけではないのは明らかである。ただ，この *Marriage* を著した時点では，彼は自己の発見したと信じた新しい真理の前に，余りにも自負と自信に溢れていたため，このように烈しい否定的評言を下すことになったのである。

9

さて，この天使はどうなったか。第五の「幻想」がそれを語っている。

天使は自分の前に姿を現した一人の悪魔から，次のような挑戦的な説教を聞かされるのである。

'The worship of God is: Honouring his gifts in other men, each according to his genius, and loving the greatest men best: those who

envy or calumniate great men hate God; for there is no other God.'[16]

一人ひとりの人間の中に，その分に応じて与えられた才能を，とくに偉大な人たちのそれを敬うことが，真に神を崇めることである，神はそれ以外にはないのだから，と言うのである。約めて言えば，天才こそ神であるということである。これを聞いた天使は，顔色を変えて反駁する，

'Thou Idolater, is not God One? & is not he visible in Jesus Christ? and has not Jesus Christ given his sanction to the law of ten commandments, and are not all other men fools, sinners, & nothings?'[17]

天使にとっては，イエス・キリストの中に姿を見せた唯一の神しか存在しない。イエスだけが人間の守るべき掟である十戒を示されたので，他のすべての人間は，とるに足らない愚か者，あるいは罪人ではないか，と。悪魔はこれに対して，さらに強く反論して言う，

The Devil answer'd: 'bray a fool in a morter with wheat, yet shall not his folly be beaten out of him; if Jesus Christ is the greatest man, you ought to love him in the greatest degree; now hear how he has given his sanction to the law of ten commandments: did he not mock at the sabbath, and so mock the sabbath's God? murder those who were murder'd because of him? turn away the law from the woman taken in adultery? steal the labor of others to support him? bear false witness when he omitted making a defence before Pilate? covet when he pray'd for his disciples, and when he bid them shake off the dust of their feet against such as refused to lodge them? I tell you, no virtue can exist without breaking these ten commandments. Jesus was all virtue, and acted from impulse, not from rules.'[18]

これは驚くべき強弁である。強引というのを通り越して，狂暴とさえ言える。「愚か者はどうなるものでもないから捨てておけばよい。イエスは十戒をことごとく破ったではないか。十戒など破らなくては，そもそも徳というものはすべて存在し得ないのだ。イエスは徳そのものであったから，掟に従ってではなく，自分の衝動によって行動されたのだ」というのである。まさにこれこそ悪魔の論理である。

ここに至って，すべての宗教的・倫理的規範は無視され，廃棄された。尊ぶべきものは，ただ人間個人の内発的な意志に基づく自由な行為のみである。ブレイクにとっては，イエスがその模範であった。しかし，このような思想が当時のキリスト教神学にとって大きな異端であり，また多くの人びとにとっても，容易に受け容れ難い極端なものであったことは明らかであろう。

イエスが仮りに神ではなく人であったとしても，彼は普通の人とは到底同一視することはできず，それ故その行為も，通常の倫理的基準から判断される性質のものとは言い切れないであろう。のみならず，外見上十戒に反くような言動があったとしても，その前後の事情や背景を考え，同時にイエスの心情を考え合せるとき，それには然るべき理由があったのであるし，またブレイクの解釈や言い方にも多くの疑問があると言わなければならない。

また，愚かな人間には救いは無い，との見方（晩年にも「愚か者は天国に入ることができない」と言っている[19]）も，あまりにも偏狭な態度であろう。人間はみな多少愚かな存在である。ブレイクの言う通りであるならば，私たちのほとんどの者は，まず救われることがないであろう。このあたりのブレイクの言葉は，新しい福音を発見し，告知する者の昂然たる熱と力に溢れていて，痛快ではあるけれど，いささか高慢と自惚れの響きがあると言わなければならない。

ともあれ，天使はこの悪魔の言葉を聞くと，「両手を差しのべ，燃えさかる炎を抱きしめ，焼き尽されて，エリヤとなって昇天した」のである。そして今では，この天使は悪魔となり，ブレイクの「特別な友人」となっている，という。炎とはブレイクの言う energy であろう。天使の改宗，悪魔への変身が，ここに実現したわけである。

この *The Marriage of Heaven and Hell* は *'A Song of Liberty'* を以て終っている。この「自由の歌」は，番号をつけられた二十の短い文と，フィナーレの合唱とから成っていて，*The Marriage* より少し後に作られたものらしいが，現存するすべての原本に，その最後の三頁として加えられている。[20]これは，この書の序詩 *The Argument* に対応するもので，詩人が，今や新しい革命の夜明けが訪れたことを，全世界に向って宣言する趣旨のものである。それは次のように始まる。

1. The Eternal Female groan'd! it was heard over all the Earth.
2. Albion's coast is sick silent; the American meadows faint!
3. Shadows of Prophecy shiver along by the lakes and the rivers and mutter across the ocean: France, rend down thy dungeon;
4. Golden Spain, burst the barriers of old Rome;
5. Cast thy keys, O Rome, into the deep down falling, even to eternity down falling.[21]

The Eternal Female とは，自由を求める人間本然の生命のことであろう。これは，フランス・アメリカ両革命の影響下にあって，立ち上ろうとしている諸国民への，激励のメッセージである。「永遠の女性」はその生れたばかりの幼児 'terror' を手に取り上げる。革命児であるこの新生児は，旧制度下の王権や教会にとって「恐怖」なのである。

8. On those infinite mountains of light, now barr'd out by the atlantic sea, the new born fire stood before the starry king![22]

壮厳・雄大な光景である。新しく誕生した火と燃える革命の子は，大西洋の彼方，光りかがやく無限の山脈の上に立ち， the starry king と対決しようと

している。「星界の王」とは，Murry も言っているように，[23] 整然と定った軌道を辿る星の世界によって象徴されるような，機械的な法則，精神のない掟によって支配されている，現実世界の権力のことであろう。当然，王は革命の子に嫉妬を燃やし，彼の燃ゆる髪を掴んで，地上に投げ落す。しかし，それと同時に，彼もまたその軍勢もろとも，炎の中を革命の子を追って落ちて行く破目となった。王はその一族と共に大地に激突し，廃虚の中に身を埋めるが，一夜明けるとなおも抵抗をあきらめず，再び一戦を挑もうとして，その陰惨な姿を現わす。

> 18. With thunder and fire, leading his starry hosts thro' the waste wilderness, he promulgates his ten commands, glancing his beamy eyelids over the deep in dark dismay,
> 19. Where the son of fire in his eastern cloud, while the morning plumes her golden breast,
> 20. Spurning the clouds written with curses, stamps the stony law to dust, loosing the eternal horses from the dens of night, crying:
> Empire is no more! and now the lion & wolf shall cease.[24]

しかし，「火の子」は暁と共に「呪われた言葉の雲を払いのけ，石の掟を塵の中へ踏みにじり，永遠の馬たちを夜の厩舎から解き放って勝利の叫びを上げるのであった，

「帝国はもはや存在しない。獅子や狼は死に絶える」と。

そして最後の合唱の声が響きわたる。

> Let the Priests of the Raven of dawn, no longer in deadly black, with hoarse note curse the sons of joy. Nor his accepted brethren, whom, tyrant, he calls free: lay the bound or build the roof. Nor pale religious letchery call that virginity that wishes but acts not![25]

この語調にはきわめて強烈なものがあり，ここでもブレイクは，生きる歓び

を曇らす者たち，人間本然の欲求を抑圧する者たち，を烈しく非難して止まないのが，ひしひしと感じられるのである。

For every thing that lives is Holy.

原本ではこの一行が，最後の頁の下部に，赤い文字で大きく刻まれている。これこそ，ブレイクの信条の簡潔きわまる告白である。論理でなく，心情の吐露である。「生きるということは歓びなのだ。その歓びを奪ったり，傷つけたりすることは，決して誰にも許されないのだ」と彼は叫んでいるのである。

結　語

以上，かなり詳細に亘って，私はこの作品を辿って来たが，最後に振り返って，その内容の主要な点をまとめ，それについての私自身の意見と感想を記しておくことにする。

この作品は私にはその全体の印象から，彼のあの有名な詩 ***'The Tyger'*** の世界を思い起させるものである。異様なまでの力と熱と「恐るべき均齊」がある。あの詩の中で，彼は「虎」の創造主に向って，

Did he who made the Lamb make thee?

と驚歎の声を上げているが，この作品を作ったブレイクに対しても，私は，「あの清らかにも優しい『無垢の歌』を作った貴方が，この凄まじい作品を作ったのか」と訊ねずにはいられない。しかも「虎」もこの作品も，ほぼ同じ頃に生れているのである。ここに，私は，彼の言う所の「相反するもの」の共存，ブレイクの心の深淵を覗き見る思いがするのである。

Every man has a Devil in himself and the conflict between his *Self* and God is perpetually carrying on.[26)]

これは死の前年，ブレイクがさきのロビンソンに語った言葉であることを考

えるとき，私は深い感慨を覚えざるを得ないのである。ブレイクもまた人の子であった。彼の強大な「自我」という悪魔と，「神」との格闘は，彼の生涯を通じて続いたのであったと思われる。

この書は彼の「哲学概論」とでも言うべきものである。彼の思想の精髄とも言うべきものは，ほとんどここに，原型または種子として含まれている，と言っても過言ではないであろう。その哲学は，もちろん，徹頭徹尾，詩的，芸術的なものであり，論理的，分析的なものではない。彼自身が「理性」を却け，「想像力」を以て，人間精神の本質的機能と見たのも，彼の本性が類いまれな生粋の芸術家であったことに因るものである。彼が科学を嫌悪し，ベイコン，ニュートン，ロックの知性を有害ないし無用のものと見たのは周知のとおりである。これには彼の知的教育の不足にも，その大きな一因があろうし，社会的地位からの感情的反撥もあったのであろうが，本質的には，彼の精神の性格によるものであったと思われる。知性による分析，デカルト的懐疑などは，彼には無用無縁のものであった。芸術家的な直観，宗教家のものである深い内的確信が彼の哲学の方法であった。

しかし，それにもかかわらず，否，むしろそれ故に，彼の思想は，人間存在の深い真実を，鋭い洞察力によって，確実に捉えている事実を，私たちは否定することができない。その真実の中で，主要なものを敢て数え上げれば次のようになろう。

第一は，徹底的な「人間中心主義」である。神は人間を超越し，人間から離れて存在するものではなく，常に人間の中に在って生きるもの，働くものであるという信念である。それ故，すべての人間は神であり，イエスもまた人間の中の最高の人間であった。神は愛であるゆえに人間もまた愛なのである。神＝人，人＝神である。これは，数々の欠陥と悪に満ちた現実の人間の姿を思うとき，果して真実として信じられるであろうか。この疑問をブレイクも知らなかったはずはあるまい。彼は人間の中の悪の存在をどのように考えていたのであろうか。この問題にふれて，ブレイクがさきのロビンソンに語った所はじつに興味深いものがある。「すべては神の眼から見れば善である」(**'Everything is**

good in God's eyes') と言ったブレイクに，ロビンソンは，それでは「人間のすることに絶対的な悪はないのかどうか」と尋ねると，ブレイクは

'I am no judge of that—perhaps not in God's eyes'[27]

と答えているのである。おそらく，一私はいささか大胆な推測を敢てするのであるが一，ブレイクは，神も悪や誤ちを犯すことがあり得ると，断定的にではなくても，半ば疑いながら，考えていたのではないかと思う。しかしそれにもかかわらず，神は根本的に全体的に見て，善であり，真であると。「人は神である」との一見独断ないし冒瀆の言葉の裏に，彼の大いなる人間肯定の精神が息づいているのを感じるのである。これは本質的にヒューマニズムのものである。

第二に，これと深く関連するが，「生命の尊厳性」の思想である。 'Every thing that lives is holy' という彼の金科玉条は，すべて生けるものは神によって生かされているという彼の信念と表裏一体のものである。彼こそシュヴァイツアーの思想的先駆者である。神のものである生命は，生けるものにとって，至高の価値である。それ故にこそ，生きることは歓びである。その生命の自由を抑圧することは，それ故，最大の悪である。彼が革命を熱烈に支持したのも，この信念によるものであったのは言うまでもない。

第三に，以上の前提に基いての，「個体の独自性の尊重」である。人間もその他の生物も，すべて神聖で自由な存在であるから，そしてその一つ一つが異っているのだから，彼らはそれぞれ，自己の独自性に従って生きることが，その正しい在り方である。外部からの一律な強制や掟によって支配されることは，本性を失うことであり，誤った生き方である。個人個人の内発的な欲求から出た自由な行為こそ，真の善なのである。

第四に，彼の霊肉一元論がある。精神と身体という，この永遠に完全には和解しそうにもない二元の対立は，無視することも否定することもできない生の事実として，私たちの日常の経験の至る所に生きつづけている。古来，洋の東

西を問わず，多くの思想家や宗教家が，この問題と取り組み，苦しみながらも，何らかの解決を与えようと努めてきたのは，まことに当然であったと言わねばならない。ブレイクはこの困難な問題を，その心身一体論によって，一挙に解決したかに見える。彼によれば，肉体というものは存在せず，それは霊の一部に過ぎないのだから。彼の論証，というよりは断定，は明らかに曖昧さを残していることは，先に見た通りであるが， energy という概念によって，この対立・背反をともかく止揚統一しようとしたことは，やはり独創的な試みとして認めなければならない。（現代ではベルグソンの思想がこれに近いのである）ブレイクの大胆な断定によって，この永遠の人間的問題とも言うべき心身二元の対立が，全面的に解決されたとまで私は言うことができないが，身体が単なる物質ではなく，魂の生ける座として，精神性に高められている存在なのだ，というのが彼の真意とすれば，正にその通りであると賛同せざるを得ない。ブレイクの功績は，結局，当時不当に卑められていた肉体の地位を救い上げ，正当な高みに置いたことにある。この意味でも，彼はまた醇乎たるヒューマニストの名で呼ばれなければならない。

これまで見てきた通り，この書には奇矯なもの，過激なもの，誇張されたもの，怪異なものがある。挿絵にもグロテスクなものさえ見出される。その或るものには私は反撥をさえ感じることを告白せざるを得ない。しかし，それにも拘らず，ここには途方もなく健康で率直な人間が揺るぎなく立っている。その古色蒼然たる宗教的衣裳の外観に反し，その思想の主題は意外にも，きわめて現代的であり，私たちに身近かなものであるのに驚かざるを得ない。この詩人哲学者の巨大な思想の光芒は，今なお私たちを包んでいると言うべきであろう。

（完）

註

1) *The Marriage of Heaven and Hell* (Reproduced by Oxford Univ. Press & annotated by Sir Geoffrey Keynes, London, 1975) p. xii.（以下，この書をM. と略記する）
2) *Blake Complete Writings*, ed. by Geoffrey Keynes (Oxford Univ. Press, London, 1967), pp. 148-9.

（本稿中のブレイク原文の引用はすべてこの版による。以下，K. と略記する）

3) S. Foster Damon: *A Blake Dictionary* (Thames & Hudson, London, 1976) p. 349.
4) K. p. 149.
5) M. Plate 3 への註
6) K. p. 149.
7) K. p. 149.
8) J. Middleton Murry: *William Blake*, (Jonathan Cape, London, 1933.) p. 64. (以下，Murry と略記)
9) K. p. 149.
10) K. p. 149.
11) A. Gilchrist: *Life of William Blake* (Everyman's Library, London, 1945) p. 68. (以下 Life と略記)
12) K. p. 153.
13) K. p. 97.
14) K. p. 157.
15) Life. p. 334.
16) K. p. 158.
17) K. p. 158.
18) K. p. 158.
19) K. p. 615.
20) M. plate 25-27 への註。
21) K. p. 159.
22) K. p. 159.
23) Murry. p. 84.
24) K. pp. 159-160.
25) K. p. 160.
26) Life. p. 342.
27) Life. p. 334.